

「教育の一つの原型」

山形大学では、教養教育の一環として、「山大マインド」なるタイトルのもとに、山形大学の卒業生で、各界で活躍している若手の方々に講義をしてもらい、後半ではその話に基づいて講師と学生が討論を展開するという講義を、学長主催でこの5年間行ってきました。

さて、いま我が国では「教育はいかにあるべきか」という事に関して盛んに議論が展開されておりますが、先日、「山大マインド」の講義録のゲラ刷りに手を入れておりましたところ、現在の教育論議に一石を投ずるのではないかと思われる教育活動の紹介が講義録に載っていることに気づきました（私は実際講義も聴いているのですが、そのときは問題意識が低かったためか、あるいは老人性痴呆のためか、彼女の講義の内容のこの部分について忘れておりました）。私はここに示されている教育活動は、教育の一つの原型を表しているものではないかと思えます。

講師の許可を得て、その内容をここに紹介させていただきます。

第6回講義の講義内容 平成18年6月16日

つるおかユースホステル運営

菊池 智恵 氏（平成13年農学研究科修了）



山大マインド
先輩の話を聞いてみよう！

菊池 智恵

皆さんこんにちは。鶴岡から来た菊池智恵と申します。よろしくお願いします。本当は去年も話をしたので、「いやー、同じ話をするのは恐縮です」とお断りしたんですけども、蜂屋さんのラブコールでまたこの場所に帰ってきました。去年の資料を見て知っていることもあるかもしれないんですけども、重なるところはたくさんあると思うんですが、そこはよく分からないとか、話のつじつまが合っていないとかいうところは、是非指摘して教えてください。私も話が慣れていないので。よろしくお願いします。

お話しすること

- ◆ 自己紹介
- ◆ 在学中と卒業後のあゆみ
- ◆ いま、取り組んでいること
- ◆ これからの夢
- ◆ 皆さんに伝えたいこと

自己紹介

- ◆ 1976年北海道生まれ。親の転勤で縁あって山形へ。
- ◆ 山形大学大学院農学研究科(森林生態学)修了。
- ◆ 現在はパートナーが始めたユースホステルを手伝いながら、地域や暮らしに根ざした環境教育や模索中。
- ◆ 家族:夫、私、もうすぐ2歳になる息子の3人。

今日お話しすることです。まず自己紹介、大学時代に何をしていたかと卒業後どういうことをしていたかということ、今取り組んでいること、そしてこれからの自分のやりたいことですね。あとは皆さんにお伝えしたいこと。この5つをテーマについて話していきたいと思います。

まず自己紹介です。学長先生からもご紹介がありましたけれども、北海道で生まれました。たまたま小学校4年生の時に、親の転勤で山形に来て、それからずっと山形に住んでいます。もうすっかり、もうウン十年住んでいるので山形県人です。

大学は縁あって農学部の森林生態学に入って、森の勉強をしました。今はパートナーが始めたユースホステルを手伝いながら、地域や暮らしに根ざした環境教育を模索しているところです。

皆さんユースホステルはご存知ですか。ユースホステルに泊まったことある人？あ、いらっしゃいますね。ユースホステルってこんなところだよって説明できる人いますか？手を上げた彼女はどのくらい利用したことありますか。どこか海外に行って？どこに泊まりましたか？

(学生) スイスのユースホステルです。

はいスイスですね。こういったように、実はユースホステルというのは日本だけじゃなくって世界各地にある、青少年の野外活動のサポートをする場として広がったのが最初です。

ドイツが発祥の地で、ある小学校の先生が、夏休みに小学校の野外活動の宿泊施設として、使っていない夏休みの小学校を宿泊施設にして使い始めたのがきっかけで、子供たちにそういう活動をさせたい時に、何かいい、簡素でいい施設がないかということで広めたのがユースホステルの原型です。ユースホステルは日本にも大体 300 ヶ所くらいあります。そういう野外活動だけじゃなくて、世界中に広まっているので、いろいろな人の旅の拠点として、本当にたくさんの人に利用されている施設です。

たまたま私のパートナーが、今から 6 年前に閉館されたおんぼろのユースホステルを借りて、環境教育とか市民活動の場にしたいって始めたのを、私も一緒になってやらせてもらっているような形です。家族は、私と夫ともうすぐ 2 歳になる息子がいます。

在学中と卒業後のあゆみ

- ◆ 在学中は何をしていたかという・・・
- ◆ 森林生態管理学研究室で森について学ぶ
動物と植物の相互関係→樹木の種子散布の研究
サークル:マンドリンクラブでギターを弾く
- ◆ 将来は研究者になって自然保護活動をしたい
・・・現実と理想のギャップ
もっと社会に出て実際に行動し、自然を守ることを
訴えなければならぬ!
環境教育の大切さを実感

在学中はどんなことをしていたかといいますと、森林生態管理学研究室で森について学びました。本当は森について勉強しようと思って入学したわけじゃなかったんです、実は。入学した当初は、環境問題を考えた時に食糧問題を解決したいなって思って、食料関係の研究室に入りたいてって思っていたんですけど、ちょっと調べ方が甘くって、生物環境学科ではその研究室に行けないということに入学してから気づいて、どうしようか迷ったんですけど、「そういえば私、森も大好きだから、森を守るような仕事もしてみたいな」と片隅には

思っていたので、これは、そういう選択をなささいということなのかなと思って、学科を変えることなくこの道に進むことに決めて学びました。

実際どんなことを研究していたかという、動物と植物の相互関係について勉強したいと思ったので、特に樹木の種子散布の研究をしていました。木というのは、まるっきり動けません。でも動けないけれどもいろいろな戦略を持って生きているということが分かっているので、とっても興味深くって、特に鳥によって種子が散布される、その形態を持つ樹種について研究していました。

あと、サークル活動はマンドリンクラブでギターを弾いていました。マンドリンクラブの人いますか？いないかな。マンドリン分かります？どんな楽器か。わかる人いませんか？どんな楽器かちょっと説明してください是非。

(学生)ウクレレを大きくしたような・・・。

そうですね。ギターよりもっと小さくて、小さい琵琶じゃないけど・・・、ウクレレをもうちょっと大きくしたような、ですよ。ちょっと丸みを帯びているような、あれです。私は伴奏として使われているクラシックギターの方を担当してみんなで活動していました。

農学部に移っても、小白川キャンパスまで通って皆で演奏会を楽しんだり、農学部の学祭とかで、皆の前で弾いたりとか。あとは病院に行って、チャリティコンサートを承って弾いたりとか、それなりに活動する場があってとっても楽しかった思い出があります。今でもサークルの仲間とはつながりがあって、時々会ったりして、本当に大事な宝物の人間関係があるひとつです。

サークル活動をしながら研究も進めていたんですけども、将来は研究者になって自然保護活動をしたいということを、ずーっとずーっと願いながらやっていた。大学院まで進んで、そのあとも博士課程に進むつもりではいたんですけども、どうやらちょっと違うなというのを感じ始めながら大学にずっといるような感じになってきて、悩み始めました。



大学の中において、社会活動として地域に関わって生きるというのはなかなか難しいんですけども、その中で、たまたま機会があって鶴岡市の郊外にある里山の、高館山というところがあるんですけど、その湿地がつぶされる、それを守ろうという活動を、たまたま知り合いの方が始めたので、じゃあ私も何か手伝いが出来ないかなって、一緒にそのグループに入ってやったことがあります。

その時に、湿地をつぶそうとした市の方というやり取りする中で感じたのは、大事だっていてもなかなか自然の大切さが伝わらない。その地域の人達は自然を守ることよりも経済が潤うことばかりを考えて、また本当に湿地の近くに住んでいる人達は別に大事だと思っていなくて、離れたところにいる人のほうが守るべきだといっている現状。おかしいな、おかしいな、どうしてこうなのかなというのをすごく感じていました。

多くの人に自然の大切さを伝える機会というのはこの日本の中でまだ少ないんじゃないか、学ぶ機会も少ないんじゃないか。逆にだから、そういう活動を進めるためには、そういう理解を皆にしてもらおうのが先決じゃないかというのを感じ始めました。

研究者になって基本的な自然を守るためのいろいろなデータを作って、それを提案して利用してもらうのもひとつの保護活動にはなるんですけど、でももっと実際に社会に出て、実際に行動して自然を守ることを訴えなければ、これはおちおち、黙っていたらあっという間に地域の自然は無くなっていくというのを、目の当たりにして、すごく切実に感じるようになりました。

ですから、研究者としてよりも、実際に泥臭いけど、地道な活動をしていくのが私には合っているんじゃないかなって思い始めました。そういう意味での環境教育の大切さを実感したので、ここでちょっと方向転換してみようかなということ、ちょうど大学院を終わるころに考え始めて、研究室の先生には、「お前どうするんだ」と言われつつ、就職活動も大してせずして過ごして、いろいろ考える時間に当てていたところもあります。もっとも、先生はすごくいい先生で、大学の学問として研究する良さとか素晴らしさとか、そういうのも教えてくれましたけれども、私の性に合わなくて、なかなかそこまでおっつかなかったというか、能力がなくてアップアップだったので、私には能が無いなという限界を感じたところもあって、ちょっと考え直してみよう、大学を卒業してから時間をとって、これから見つめなおしてみようかなとちょっと思っていました。



それで、その後どうしたかということ、大学を終えてから1年間、学生時代に自由に動いて回ることがなかなか出来なかったのが、アルバイトしながらいろいろ歩いてみようと思いました。出来なかったことをしてみようということで、その時にもユースホステルは知っていたので、そこで手伝ったり市民活動のお手伝いをしたりとか、あとは環境教育に興味があったので、日本の、いわゆる魁といわれる環境教育の現場に足を運んで、実際に自然学校のプログラムのお手伝いをしたり、見てみたりということをしてみました。

あとは、日本だけじゃなくてもっと外に目を向けて視野を広げたいってずっと思っているけど、大学時代では私の場合は叶わなかったのが、山形県でやっているコロラド文翔塾という社会人の国際人養成講座に応募して参加させてもらって、コロラドのデンバーで1ヶ月間ホームステイしながらデンバー大学に通って、アメリカの社会問題を学ぶというプロ

大学を終えてからの1年間

- ◆アルバイトをしながら自分の将来を模索
ユースホステルや市民活動の手伝い
- ◆日本の環境教育の現場に足を運ぶ
- ◆米コロラド州デンバーで1ヶ月ホームステイしながらアメリカの社会問題を学ぶ(コロラド文翔塾)

→暮らしに根ざした環境活動をするのが一番大切!

グラムを受けさせてもらいました。

この時に学んだことは、私の価値観を大きく変えるきっかけになったので、すごくよかったなと思っています。今の日本の経済は敗戦からずっと、アメリカの社会を追うような形できたので、今現在のアメリカが、これから日本の社会で起こりうるようなことが、たぶん日本が抱えるであろう何年か先の問題がもうすでに起こっているような状態だということ的前提にすると、いろいろな問題を目の当たりにするのは、私にとってこれからこの日本で生きていくためにはいいんじゃないかなというのは感じました。



具体的にどんなことを勉強してきたかという、アメリカの経済だったり、人権問題だったり、環境だったり農業だったり。テーマはさまざまだったんですけど、教育だとか、いろいろ見てきました。その中でやっぱり感じたのは、アメリカは特に、もう日本以上に資本主義経済が一番という考え方の中で、お金が無きゃ何も出来ないとか、例えば食事はお粗末にしても自分の余暇は楽しみたいとか、そういう競争社会は当たり前で、能力主義でというような社会。日本以上に厳しい、そういう競争社会を目の当たりにして、本当の人間の

豊かな生活っていったい何なのかなって…。確かに便利で、日本よりももっと、お金さえあれば楽しく暮らしていける、そういうような社会でしたけれども、でも果たしてそれが実際に人間の幸せなんだろうかと思った時に、「やっぱりこれじゃいけないよな」という思いを抱えてきて、まだまだ日本はアメリカほど資本主義社会じゃないから良かったかなって。でも、これから先もっともってこれが進んだら、アメリカの二の舞を踏むような形になるんだなって思うと、そうじゃない形でもっと社会をよくする活動を、地道ながらもしなきゃいけないんだなというその思いを強くしました。だからそういう意味でいい経験をさせてもらいました。

それで、いろいろな経験をした時に、暮らしに根ざした市民活動とか、特に私が興味を持っている環境活動をするのが一番大切だなって改めて思いました。どうして環境活動に私がこだわるかという、どんなに経済が豊かであっても、この地球が健康でなければ絶対私たちは生きていけないから、そういう意味で環境が一番大事だな…。生き物が生きていけるのは、絶対すばらしい環境が残っているからこそであるから、これが一番大事だよなって。でも、今の社会で一番ないがしろにされているから、これは何とかしなきゃいけないなというので、これをテーマにして私は生きていこうと、遅ればせながら決心して今に至っています。

いま、取り組んでいること

- ◆ 森の人講座 森を切り口に環境問題を考える市民活動
- ◆ ユースホステルにおける環境教育
- ◆ 保育園や学校における環境教育
- ◆ 玄米菜食(マクロビोटック)

それで帰ってきてから、今のパートナーと一緒に鶴岡のユースホステルで細々とやりながらいろいろな活動をしています。今取り組んでいることは大体4つから5つくらいですね。「森の人講座」という、森を切り口に環境を考えるという講座を、市民活動のひとつとして仲間と一緒にやっています。あとは、ユースホステルにおける環境教育と、保育園とか学校における環境教育。あとは、ユースホステルで食事として玄米菜食の食事を出させてもらっています。

どうして玄米菜食にこだわるのか。環境を考えているのに何で玄米菜食なのって思うかもしれないんですけど、健康じゃなければ何も出来ないじゃない。この玄米菜食のからくりには、もちろん環境も関わっているので、あとからちょっと話を聞いてください。

まず、それぞれどんな活動をしてるか説明していきたいと思います。

「森の人講座」。昨年度の講座なんですけど、パンフレットをちょっと見てみてください。これは今から6年前、2000年からコースを拠点にして始めました。県の生涯学習文化財団と共催でいろいろやっているんですけど、中身は私たちというか仲間で、こんなことが今必要じゃないかとか、学びとして必要じゃないかって思うことをまとめてやっています。どうして森を切り口にしたかというのはわかりますか？環境問題っていろいろありますけど、どうして森を切り口にしようと思ったかわかりますか？誰か想像つく人？いませんか。



では、皆さん森と文明の関係はわかりますか？世界の4大文明挙げてくださいますか？

(学生) インダス文明、黄河文明、エジプト文明、メソポタミア文明。

はい。では、どの文明もある事をきっかけにして滅びました。それはなんだかわかりますか？あることをきっかけにして文明は滅んで、また再び文明は発生したそうです。私もこれは実際に学んでみて、ハッと気づかされたんですけれども。それまで全然気づかなかった。どうして文明が起こって、文明が滅びるのかというのもよく分かってなかったんです。このテーマにして勉強していく中で学ばせてもらったことなんですけど、どうしてだかわかりますか。どうして文明は滅んでしまったんでしょうね。せつかく発生した文明。一時は栄えたけどどれもこれも結局うまくいかないで消えていきましたよね。何が原因だったんでしょう？

(学生) 自然災害。

うん。いいところっていますね。

自然災害。そうですね、結果的には自然災害ですよね。結局森のあるところに文明は生まれて、森がなくなって文明は滅びた。それが歴史の繰り返したことだということを説いている、安田喜憲先生という方がいて、その方の話を聞いて納得したんです。「ああ、そうか、そういえばそうよね。どの文明も結局は森林を切り開いて文明が築かれて、結局森林を切りすぎたせいで砂漠化して、結局その文明を維持できなくなって、人間も生きられなくなって滅びていったんだよね」と。「ああ、森なしでは人間て生きていけないんだな」というのをますます感じました。そういう意味で、本当に大切な物なんだって。

でも、まだまだその大切さとか恩恵をあまり感じながら生活していないなと思ったので、森を切り口にそういう提案をしていくことで、よりそういう暮らしをしようという人を増やせるんじゃないかという願いをこめながら、森をテーマにいろいろな分野で市民に呼びかけて一緒に勉強しましょうって始めたのがこの講座です。

四季折々やっているんですけども、主に5つをテーマにしています。座学で「講座」。



あとは森に親しむ、自然に親しむ、自然に遊ぶということで「遊学」。あとは実際に地域で、自分たちで活動していくということが一番大事なので、学ぶだけでなくフィールドを持って活動していこうということで、「天然林づくり」と、あとは自分たちが利用する木材、たくさんありますよね、でもなかなかそれを自分たちで自給できるような形、特に今の日本の森林の、林業の、木材の自給率はかなり低迷しているので、そういう意味でも私たちはもう一度学びなおさなきゃいけないんじゃないかということで、「森づくり～林業教室～」。

あと、地域の「植物観察」などを含めながら、複合的な学びをここで提案させてもらっています。

では、その様子を見てもらいましょう。特に皆さんに関わって欲しいなと思うのは、やっぱり学びも大切ですけど、実際に行動すること。行動しなければ社会は変わらない。ですので、実際に活動することに重きをおいてやっています。



たまたま、森づくりをはじめようと思った時に、近くにフィールドないかなと思ったら、すぐ近くにあったんです。ちょうどユースホステルの国道を挟んで目の前に、小さい葉山という山があったんですけど、そこが、十数年前に松枯れがあって、一度すごく荒れてしまって、木が何にも無くなってしまったんです。市とか県も多少手入れはしたんですけど、あとはもうそのまま、お金が無いからとか、期限限れたからということでほっぽっていったところなんです。

そこを元々の森に戻したらどんなに素晴らしいだろう、いいフィールドじゃないかということで、そこを拠点にして森づくりをしようと考えました。でも、この葉山、山といっても、小さい300メートルぐらいの、海に面した山なんですけれども、見てください、このちょうど山の先端の部分なんですけど、本当に岩が突出していて何にも無い。夏場になればカヤとかいろいろな雑草が生えて緑には包まれるんですけど、実際海岸側というのは、木はほとんど無いような状態で、本当に荒涼とした、心も寒くなるような景色が広がっていて…。でもこれ何とかしなきゃいけないよねと。

でも、木を植えるということは、実際にやってみたことは無くても、難しいだろうなということは想像に難くなかったので、ちょっと考えました。あまりにも面積が広かったのになかなか手に負えないし、どうしよう。大変なのは分かるけれども、効率的というか、もっと楽しく皆でできる方法はないだろうか考えた時に、市民でも簡単に出来る森づくりがあるというのを知って、それを今やっています。

この中で木を植えたことある人いますか？一人かな。どこで植えましたか？

(学生) 地元の山に。

地元の山。何植えました？

(学生) 山桜。

そうですか。いいですね。山桜、どのぐらいの大きさを植えました？

(学生) 1メートルくらい。

1メートルくらい。その時にどうやって埋めました？

(学生) ただ穴を掘って植えました。

穴を掘って。どのぐらいの穴を掘りました？

(学生) 中学校の時なのであまり覚えていません…。

きっと、50センチから1メートルくらいまで掘って植えたと思います。大体、木を植えるということ、例えば専門に木を植えている方とかも、1メートルくらいの苗木とか、実際大きな苗木を使って穴を一生懸命掘って、根が枯れないように本当に手間をかけて植えます。でも、こんな岩場のガリガリしたようなところでそんな作業は出来ませんよね。それで、どうでした？時間がかかって大変だったんじゃないですか。すごく汗だくにな



って、それこそ1本植えるだけでも本当に苦労して植えなければいけません。

そういう意味で、素人では森づくりなんか絶対出来ないって言われていたんですけども、置くだけで植えられる植林の方法があると聞いて、私たちはその植林の方法を学ぶために、実際に開発した先生をお呼びして森づくりをはじめました。



カミネッコンという、このリサイクルペーパーを使って、今、植林をしています。カミネッコン広場と書いてある資料を見てください。これは、植物の性質をうまく生かして、森づくりが出来たらいいなという、考案された先生の長年の研究から考えられたんでしょうね。リサイクルのペーパーを組み立てて置くやり方です。3つセットになった、リサイクルペーパーの型紙です。

これを組み立てて、濡れた新聞紙をちぎって詰めて…型枠をしっかりと崩れないようにするためです。この詰め物は、別に新聞紙じゃなくてもいいです。リサイクルできるようなペーパーだったら何でも。例えば雑誌の紙でもいいですし、チラシでもいいですし、シュレッターにかけた紙でもいいです。何でもいいんですけど、不要になった紙を濡らして入れて、ポット状にします。



それでポットにしたものを、自分で苗木を作って入れて、さらに土を入れて植えるというか、置くだけでいい。すごく画期的です。どういうことかという、苗木の根っこを傷めずにポットに植え替えをして、現地に持っていきます。現地で雑草とかを植える部分だけ除いて、ポットを置いて、周りに少し土をかぶせてやって。あとは、この苗木が自然と自分の力で根を張る。その力を十分に生かして育ててやる。

実際には、このペーパーは大体2、3年持ちます。この苗木が自分で根っこをしっかりと張って、根がしっかりと張ったぐらいには大体このペーパーは風化して自然に戻る。そういうような形です。

資料にも使い方とか書いてあるんですが、普通こういう厳しい環境に置いた時、植物にとって何が一番大切かという、まず確実に根っこを張ること。そして育つためには、あまりにも乾燥しすぎないで、水分などがしっかりと得られるかどうか、ということもあります。あとは、他の雑草にいかにも負けないようにするかということです。実際現地に行って、1個だけ植えてはちょっと心もとないので、何個か、例えば塊で3個か4個植えて、そのうち1本でも残ればしめたものかなという考えのもと、大体これを1箇所につき3つぐらい固めながら、そういう場所をいっぱい作って今、植えているところです。

一番は、自然の摂理に沿っているということ。植物、木にぜんぜん負担をかけないで植えられるよね。植木屋さんとか、先ほどの学生さんが言ったように、大きい木を植えるというのは植物にとってもかなり負担がかかります。小さいうちだと現地の移った環境に適應する能力はありますけれども、1メートルも大きくなった木は、根っこを張るのにも大変ですし、その場所で環境に適應するのも、大きくなればなるほど時間はかかるので、そういう意味でも、今日持ってきているのは育ててまだ2、3年くらいのカシワの苗なんですけれども、こういう苗を自分で作って、小さいうちから厳しい環境に置けば負けない。そういうメリットもあります。

名前がまたユニークですよ。カミネッコン。紙で根っこを守りながら育てるからカミネッコン。これを考案した東三郎先生は、北海道の襟裳岬、あのプロジェクトXでも有名になった襟裳岬の緑化活動を進めた研究者でもあるんですけども、本当に子供から大人、

お年寄りまで、木を植える楽しさとかすばらしさを味わって欲しいというので考えた方です。もう 80 数歳にもなるんですけど、今、北海道のみならずモンゴルの草原に持って行って、このカミネッコンを抱えてですね、現地に柳の木を植えるような緑化活動とかもされていて、本当にパワフルな先生なんですけれども。そういう、先生の研究の成果とか思いが形になった物で、本当に今、全国に広がっています。特に北海道、お膝元では、市民の森づくりというこの苗木ポットが使われて、例えば石狩川の流域では 300 万本、河畔に植えようと。本当に毎年毎年たくさんの方が集まって植えているそうです。

そういう意味でも、市民のちょっとした力が大きな力になるきっかけを作ってくれたのが、このカミネッコンじゃないかなと思って利用させてもらっています。

何が面白いかというと、森づくりというのは大変だよと言うんじゃないくて、楽しみながら、暮らしの中にちょっと楽しみがあってこうできるとというのが一番よくって、それも、資料にも書いてあるんですけど、さまざまな人との出会いや交流があって、本当に、子供たちがカミネッコンに絵を描いて自分で植えて、1年後、2年後、またその場に行って木が大きくなったのを確かめて喜んでる姿とかを見ると、ちょっとしたことだけど地球に貢献したという、大きな力になっているんだなというのが実感できてすごくいいなと思っています。



実際に、私たちはカミネッコンを使って斜面に木を植えています。夏場は雑草で大変なんですけれども、草を刈って、植える場所だけ土を剥いで、カミネッコンを置いていきます。この写真はたまたま地元の中学生在が総合学習でこのカミネッコン、森づくりについて学んで最後に植えている姿です。すごくいい顔してますよね。

苗木は地元にある、葉山近辺の樹木から取って植えてます。何を植えているかということ、海岸ではとっても環境が厳しいので、その環境に耐えられるようなカシワとかケヤキとか、イタヤカエデとか、樹種は限られていますけれども、そういう、その場の環境に適応した樹種の種を拾ってプランターに植えて、実際に自分たちで育てて苗木を作って、という作業もしています。これもまた、子供たちだけじゃなくて大人の人達もこうやって植えてやるというような活動もしています。

あとは植えるだけじゃなくて、実際には植えたあとが大事ですよね。そのあとどう育っていくかというのが大事なので、手入れも欠かせない作業のひとつで、パンフレットにもあるように下草刈



りをしたり、ツル切りとかいろいろしたりして、今ある樹木も大事にしながら作業しています。



上の写真は高校生が夏場に下草刈りに来た様子です。

実際に苗木をどうやって作っているかというと、最初に種を拾ってきてプランターに植えて、1年か2年くらいしてだいぶ大きくなると、大体12センチくらいの黒いポットに1つ1つ植え替えて、根っこがちゃんと張るように、しっかりと張るように1個1個植え替えます。そうすると、根っこを切って植え替えるという作業をしなくてもいいので、手間暇はかかるんですけども、1個1個植え替えて育てています。



本当は日本海側の海岸というのは、今は黒松林が庄内の方では主流なんですけれども、昔はこういうような広葉樹の林が広がっていたという話です。庄内の方で聞いたことある人いますか？まだ1年生だから無いかな。日本海側に行ったことある人いないかな。松林見ましたか？

(学生) 砂防林は見ました。

そうですね、防砂林です。今は彼が言ったように防砂林として、黒松林は機能しています。どうして防砂が必要になったかというと、結局、今、庄内の沿岸にある黒松林も、一度破壊されて人工的に作られた林です。ちょうど江戸時代の頃に塩を作ったり薪を作ったりするために、海岸一帯のこういうような広葉樹の林を切って、みんな薪とか炭にしてしまったんですね。燃料として使ってしまった。それで林が全部なくなって砂漠になってしまって、沿岸に住む、平野に住む人達の生活を脅かすような砂災害が起こってしまったので、当時の篤志家の人達が財をなげうって、砂漠を食い止めるため、砂嵐とか砂の害を食い止めるために作ったのが、今の庄内沿岸にある黒松林です。



でも、一度人間の手によって破壊されて人工的に人間の手で作られた林は、単一の林ですよ、黒松だけしかなかったですよ。バーっとあるので、今は砂の災害は防いではいくれますけれども、やっぱり不自然な状態じゃないですか。林を見るとね、いろいろな、多種多様な樹種があってはじめてバランスが取れている状態なのだけでも、実際に人工的な単一の状態になるといろいろな問題を抱えます。

今、庄内の海岸の森で抱えている問題というのが松枯れの問題で、どうしても単一の樹種である

ために、黒松を攻撃するマツノザイセンチュウという虫が広がり、黒松が枯れて黒松林を維持していくのにちょっと難しくなっているような状態。だから病気が起こりやすいし、災害にも弱い。やっぱり不自然な状態だとどうしても歪みが出てしまうので、私たちはせっかく森を再生するならば、元あったこういうふうな豊かな森を再生したいなと願いをこめながらやっています。

植え始めてから3年、4年目くらいですけど、まだまだ成果としては、本当に10年、20年経って見ないと分からないですけど、でも多くの人が少しずつ関わってくれているので、いつかその成果が見られるのを楽しみにしながらやっています。



森がちゃんとできればこういう豊かな水も生み出します。これは実際に三瀬の山の方にある源流です。すごくきれいです。私が住んでいる三瀬という地域は、本当に山川海が集落に全部備わっている、すごく小さいけれどもすごく素敵なので、そういう豊かな環境、自然環境をちゃんと守りながらしていきたいなというのもやっぱり念頭においています。

これも三瀬海岸です、こういうふうに豊かな海が出来るという。この端っこの方に見えるのが葉山の端っこなんですけれども、山川海のつながりというのは大きくて、葉山はちょっと荒れて、今問題抱えていますけれども、やっぱり三瀬の山、集落の奥のほうにある山はまだ健全なので、豊かな湧水があって、そして川があってきれいな海があります。三瀬海岸は、テトラポットの無いすごくきれいな海で、本当に、海岸の下から湧き水が湧いているくらいきれいなところです。機会があれば皆さん是非来てください。



あとは、海と山の関係って、葉山を通じて感じるの、昔は、葉山の近辺はいい漁場で、黒鯛の稚魚とかが本当に豊かに憩うような場所だったそ

うなんですけれども、葉山が松枯れで荒れ始めたら、それがだんだん見られなくなって、海が荒れてきて、磯焼けになりつつあると。地元の漁師さんもそうやって言っているんで、磯焼けがなくなるぐらいになったら本物かなと思いつつ、活動しています。

あともうひとつ、森の人講座で実際の活動としてやっているのが「林業教室」です。林業というと本当にマイナスのイメージがあって、私も大学で、農学部で森のことについて学びましたけど、林業に関しては実際に学ばなかったんです。おかしい話ですけど、林業について勉強するということは、講義では受けましたけど実際に杉林の手入れとか、そう



いう講義は無かったです。不思議でしょう。私は何でだろうと先生に聞いてみました、学生の頃。「どうしてですか」と。「昔はね、林業が盛んだった頃は大学でも1週間くらい泊りがけで演習林に行って林業の技を学んだんだ。でも今のような衰退した社会ではあまり必要とされてないから、そういう講義は時間もないしやってない」という。ちょっと悲しい答えが返ってきて。だから私自身、大学時代は林業のことを学びたくても学ぶ機会がありませんでした。

それで、こうやって市民活動として始めていく

中で、たまたま三瀬にすばらしい林業家の方がいて、その方から林業を学ぶことで少し林業に希望が持てたのを皆さんにおすす分けしているような感じです。

前ページ下の写真、後列の右から2番目の加藤周一さんという方に先生になっていただいています。林業というと、ただ木を育てて切り出して、はい終わり。普通はそうですね。でもそうじゃなくて、彼は、「それだけじゃ本物の林業じゃない。実際、自分が丹精こめて手をかけた杉林をどういうふうにお客さんに提供しようか。じゃあ産直の林業をやるんじゃないか」といって、手がけてやっている方です。すばらしい方です。彼の、その熱意ある活動が認められて、農林水産大臣賞も受賞されたすごい方です。今、庄内の、もしくは山形での林業の発展に本当に貢献している方です。



この写真は彼の杉林、実習で春先ちょうど5月くらいに行った頃の様子です。すごく明るいと思いませんか。杉林というと、すごく暗いイメージがあると思うんですけど、これ大体7、80年くらい経っている杉林の様子です。私も初めていったときびっくりしました。こんな明るい杉林って見たこと無いなと。もちろん彼が本当に丹精こめて手をかけて、本当に手入れしてこれだけの林になったんでしょうけど、こんなに光あふれる杉林って無いなと。



こうやって手入れをして、実際に木材を売るにあたって、家を建てる人に直接売る形を、彼はとっています。そういう意味で木材の産直です。

具体的には、家を建てたいという方が彼のところに来ると、彼が自分の林に連れてって、施主さんにどの木がいいかって選んでもらうんですね。選んでもらって、それを切って乾燥させて、地元の大工さん、地元の建築士の方と一緒に、設計から家を建てるまで、林業士の彼が全部面倒をみます。そうやって地域の木材で地域の方が家を建てられる。そういう運動をしています。

国産材で家を建てるというのはすごく高価なので、なかなか普通は出来ないっていわれているんですけども、そんなことは無いというのを彼は自分で実証しています。

実際にどういう手入れをしているかというのと、写真のように木を切り出したり、自分で何から何まで、本当に彼1人で全部します。百丁歩の山を持っているんですけども、やれるところはすべてこういうような形で仕立ててやっています。写真のように目の詰まった、本当にいい杉をお客さんに提供しています。





上の写真は実習ですね、枝打ちとか、木に縄をかけてやってみたりとかしています。中の写真は実際にこうやって手入れをした杉を使って建てた家ですね。すごく気持ちがいい、多少節があっても、それを生かしてこうやってお家にはしているところですね。

今、下の写真のように梁の見える家というのはなかなか無いですけど、そういう昔ながらの、日本の風土に合った家を建てるには、国産材を使ってというのはすごくいいと思います。

例えばコンクリートの建物を建てる時にどうやって建てるか、みなさん分かりますか。コンクリートだけど、実はものすごい量の木材が使われているのをご存知ですか。どうしてだか分かりませんか？鉄筋コンクリートの建物を建てている現場見たことありませんか。どうやって建てています？わからないかな。

コンパネといって、外材、要するに東南アジアとかから熱帯雨林の木材を輸入してきて、それを集成材にしてパネルにして、その、パネルとパネルの間に鉄筋があってコンクリートを詰めて作っているの、ものすごく木材を消費しているんだそうです。私もそんなことに全然興味を持ったことが無かったので気づかなかったんですけど、実はそれだけ木材を消費しているんです。だから木の建物が無くても、実は日本では海外の森を食って箱物を建てているという現実を知って、ますます「自分たちが使う物は自分たちの地域で作らなきゃいけない。それは無理じゃないんだ！」ということ、私たちは暮らしの中でちゃんと意識しながら生活しなきゃいけない。そう思っています。

どうしても安い方を選んでしまうというのも、考えた方がいい。安いには理由があると思うので、そこに至るまでどういう過程を経ているのかとい

うことを、私たちは意識して暮らさなくちゃいけないんじゃないかと思うんです。その背景には、もしかしたら大量の森林破壊があって、現地の人はずごく苦しんで暮らしているかもしれない。そういうこともちゃんと知識として知っているか知らないかというのは大きいなと、日々感じています。

それで、彼はこうやって自分で実践しながら木材を提供しています。この家を建てるのも、例えばハウスメーカーが入ってしまうといろいろなところで中間マージンが生じます。そうすると、実際にお客さんの手に届くまでにもものすごくお金がかかります。何千万円もお金がないと家が建てられないというような状況になってしまっていて、結局、やっぱり国産材で建てるのは無理じゃないかって言われるのが嫌なので、彼は業者と直接交渉して、なるべく中間マージンが入らないように工夫して、普通のハウスメーカーで家を建てるよりももっと安く、普通に建てられるような形でお客さんに提供しているので、本当に人気です。

彼は1年に1棟分しか森から切り出さないの、もう何年も先までお客さんがいるそうです。でも、森のサイクルを考えればそのぐらいが一番いいのかな、ということだそうです。

す。こうやって、杉林から実際に利用するところまでどうなのかということを手伝ったり、木材とはまた離れるんですけども、林業というのも生活文化の中のひとつなんだということも言えると思います。

昔は、庄内の地域で、林業と焼畑というのがひとつのサイクルになっていたそうです。みなさん、温海かぶって食べたことありますか？山形に来て。赤いかぶの漬物。無いですか？お土産屋さんとかにいったことないですか？赤い温海かぶというのは、庄内の田川、温海地域で作られている物なんですけれども、造林地で伐採したあとに1年間林地を休ませるために火を放って焼畑にして、そこに赤かぶの種を置いて1年間そこで育てて林地を休めて、赤かぶを収穫したあとにまた再び杉を植えて育てる。そういう林業と農業とが一体になった生活の文化というのがあったそうなので、それを実際に私たちも学んで取り入れたらいいねということで、焼畑の赤かぶづくりも実際に実習としてやらせてもらっています。



夏場、一番暑い時期なんですけれども、上の写真のように小さい斜面の下の草刈りをして、火を放ちます。放ったあと木灰ができて、赤かぶを育てるにはすごくいい状況になるんです。このあと種を植えて、中右の写真のように斜面いっぱい赤かぶができて、収穫してみんなでいただいたりという、楽しみの部分も大切にしながらやっています。

森の人講座に関してはこれでひとつ、区切らせてもらいます。

今度は、先ほど言った環境教育の話をしていきます。実際にどんなことをしているのかということですが、

特にユースホステルでは、夏場、お客さんとして、子供たちがたくさん泊まりに来ることがあります。例えば子供会だったり、小学校の自然教室だったり。そういう子供たちを三瀬の近隣の自然に連れ出して、自然に親しんでもらったり、先ほど説明したカミネッ

コンに触れて、森づくりの手伝いをしてもらったり、あとは写真で見ていただいた海岸で、すごくきれいなんですけれども、夜光虫の観察会をしたりしています。

夜光虫ってみなさん分かりますか？見たことある人？海ポタル、知っていますか？海ポタルの植物版だと思ってください。夜光虫って、夜光る虫って書くんですけれども虫じゃないです。原始的な植物プランクトンで、日中光合成をして、夜何かに触れられると光るんです。それがまたすごくきれいで、私たちのユースホテルでは、夜、お客さんにライフジャケット着ていただいて、実際夜の海に入って、泳いで観察するという観察会もやっています。すごくきれいです。幻想的です。夜の海に入るのって本当にすごく怖いですが、それも忘れてしまうくらい、自然の神秘を体験できるプログラムのひとつなので、是非機会があれば来て下さい。



ちょうどユースホテルの隣が、国の天然記念物になっている神社の社叢林があります。先ほどもお見せしましたが、小さい池があって、池の周りに昔ながらの広葉樹の林が残っています。特にブナが生えているのが珍しいということで、国の天然記念物に指定されています。たかだか7ヘクタールくらいの小さい森なんですけれども、ここに、ものすごくたくさんの豊かな動植物があって、すごくいい環境なので、子供たちとか来たお客さんを案内して、森の素晴らしさを体感してもらったりしています。

あとはさっき言ったように、学校の環境教育のお手伝いもさせてもらっているんですけれども、本当に、幼い子供のうちから「自然が大事なんだよ」って、体で、感覚として染み込ませるのが一番大事じゃないかと考えて、保育園の自然教室のお手伝いに特に力を入れてやらせてもらっています。

大人になってしまうと先入観があって、これ良いですよって言っても、楽しいと思わなければ一生その人は自然に関心が無いし、難しいところもあります。だから、自然保護問題とかにぶつかった時は、自然の素晴らしさを体験したことが無い、感性を持っていない方々には理解してもらえないという、過去のいろいろな苦い思い出があるので、そういう意味で、自然の素晴らしさを理解した人達をたくさん増やすには子供の頃からじゃないといけないと思って、教育の現場でお手伝いすることの大切さを感じながら少しやらせてもらっています。

三瀬にはたまたま理解のある保育園の方、先生方がいらっしゃるので、月1回くらいのペースで子供たちを神社の森に連れて行ったり、近くの山とか海に連れて行ったりして、五感を使って子供たちにいろいろ触れさせるような形でお手伝いしています。

子供だからといって、まるっきり知識的なことを教えないというわけじゃなくて、分かるような形で、森の仕組みとかそういうのを教えています。ですので、私が大学生になってから初めて学んだようなことも、実は三瀬の保育園の子供たちは知っていて、ちょっと



驚きです。植物の名前とか、昆虫とかも詳しいので、将来どんな子供になるかなって、ちょっと楽しみなんですけれども、そのような形でやっています。

写真のような、すごく大きな大木のブナとかもあります。春から秋まで、本当に多種多様な植物が気比の森、さっき言った天然記念物になっている森にはあります。

春になると、カタクリが斜面いっぱい咲くので、子供たちを連れて自然観察会とかをしたりし

ています。



本当に子供って素直なので、森に入ると変わるんです。不思議だなと思います。保育園の先生が、「なぜ森の中の教育が・・・教育というか森の中で過ごすことが大事かというのは、子供たちを見て実感したわ」って、改めて感想を述べてくれたんですけど、例えばこの自然教室をする前までは、園内でずっと遊ばせていて、そうやって子供たちの様子を見ていたら、子供たち同士のコンフリクトが結構あって、喧嘩があったりとかトラブルがあったりとか、いろいろあったそうです。でも、自然の中に入ると一切そういうのが無くなって、

みんな穏やかになって人間関係もよくなって、ちょっと下の子供の面倒をお兄さんお姉さんがみるというような、そういう縦の人間のつながりもできてきて、森の中での保育というのは、人間として必要な感性とか、情操を育ててくれるとおっしゃっているの、それを大事にしています。すごく励まされながらやっているところです。

果たして人間が育つ上でどれだけ影響があるか、なんて研究した人はまだいないので分からないんですけども、でも、明らかに子供たちが生き生きとして、本当に自然な姿でいる様子が見られるひとときです。



写真左はヒメギフチョウといって、春の妖精と言われるくらい貴重な蝶で、こういう昆虫とかもたくさんいます。子供たちは、しょっちゅう、しょっちゅう通うことでこういうものを目の当たりにして、すごく感性を磨いています。木登りをしてみたりブランコしてみたりとか。



最初は、慣れないとこんな藪こぎなんか絶対に嫌だという子供たちが多かったんですけども、年を重ねるごとに、連れていく回数が増えるごとに、素のままで、こういうことも自然に受け入れて楽しんでいける子供たちが増えました。

そういう中で、秋の実りを写真のように実際に観察したり、自分で食べられる物、実際に、



秋、いろいろなものを食べられるかなってみたりとか、山菜を採ったりとかして、実際に山の恵みをいただく知識とかも子供たちなりに学んだりしています。そんな形でいろいろやっています。

あと、もうひとつ。玄米菜食について、どうして取り組んでいるかという話をしたいと思います。ここで玄米菜食とかマクロビオティックという言葉、聞いたことある人いますか？女性の方だと最近、聞いたこと無いか？

(学生) 何となく聞いたことがあります。

そうですか。もしくは玄米食べたことあるという方はいますか？何人かいますね。いつも玄米だよという人はいない？いないかな。

私も、実はある事をきっかけにするまでは、玄米菜食とかマクロビオティックとあって、そんなのは全然興味は無かったです。どうして玄米を手にしたかという、私自身の病気がきっかけでした。学生時代、どんな風に過ごしていたかって淡々と語りましたが、はっきり言って、私の学生時代はかなり波乱の、苦しい学生生活でした。

新聞記事の資料にも書いてはいるんですけども、子宮内膜症で病気を抱えながらの学生生活だったので、ほとんど、がんばって学業をこなして生活するので精一杯な生活で、講義も、受けている途中に帰ったり、寝込んで、痛みを耐えるだけで精一杯。そういう中で、みんなと同じようにやりたいという思いから必死になってがんばってきたんですけど、なかなか治らなくて、薬漬けの毎日で、これから私、社会に出て本当に働けるかなというくらい臥せていました。

そこで出会ったのが玄米で、玄米を食べると、栄養も豊かで毒を出す作用もあるしすごくいいんだよって。ガンも治るくらいすばらしい食べ物なんだ、というのを聞いて始めたのがきっかけです。ちょうど大学の4年生ぐらいに、今の私の夫が勧めてくれて、2年間、本当に良くなったり悪くなったりしながら、今まで散々病院に通って駄目だったのに、果たして食事だけで本当に治るのかしらとか、半信半疑になりながらも食べていたんですけども、2年も経ったら本当に痛みなんか感じないというぐらい、10あった痛みがほとんど0になりました。本当に不思議でした。



それ以来、食べ物って大事だになって続けています。自分がそうやって病気を玄米食で治したということのをきっかけにして、もっとそれを極めたいなって思って、玄米菜食という形で勉強しながらやっています。

資料に、マクロビオティックに関しての理論的なこととかいろいろ書いているのであとでゆっくり読んでいただきたいんですけども、もともと日本人の桜沢如一さんという方が、ちょうど今から100年ちょっと前ぐらい、自分の体験から、東洋の陰陽の思想と食養生の思想を自分で融合させて理論立てたのが、「マクロビオティック」という方法です。

最初、日本で広げようと思ったそうなんです。日本の伝統的な食文化をベースにして、生き方とか食事の取り方とかを打ち立てたんですけども、危険思想だと排除されてしまって、彼はフランスに渡って、フランスで広め始めます。それがヨーロッパなどにも広がり、アメリカにも広がって、今やっと日本にも広がっているという形です。人間には穀物菜食が一番理にかなっているという考え方で、いろいろな陰と陽の関係から、一番体に負担をかけないという形で勧めています。

玄米菜食だなんて、とっても宗教じみているとか、そういうようなイメージもあるかもしれないんですけども、実際やってみるとすごく体の調子もいいですし、本当に穀物って大事だなんて感じます。肉とか魚食べなくても、人間って生きていけるのかなって、始める前までは不思議でしたけれども、実際にやってみて、これだけ健康を維持するにふさわしい食事方法は無いかと日々実感しています。

本当に病気も治りましたし、風邪もあまりひかなくなりましたし、免疫力も上がって、すごく生き方がスマートになったと実感しています。何よりも、穀物と野菜だけなので、肉とか魚を手に入れる大変さというか、冷蔵庫の中に入れて腐るのを心配したりとか、そんな心配をしなくてもいいのですごく楽です。もし興味があればやってみてください。

体にいいということもありますし、今いろいろな環境問題が出ている中で、食糧問題というのが大きな問題のひとつです。1 キログラムの肉を作るのにどれだけの飼料を投入するか皆さんご存知ですか？ エネルギー換算、もしくは、たんぱく質に換算して。例えば、大豆に換算すると20倍かかるそうです。肉一切れを得るためにそれだけ穀物を与えなければいけない。つまりは、肉で1人の人を養うことができるとすると、穀物に全部変えてしまえば20人を養えるということです。



そう考えると、先進国と途上国の歪んだ食料の問題を解決するためにも、実は肉食というのはすごく不自然で環境にも悪いのではないのでしょうか。今はBSEの問題も盛んになっていますけれども、結局不自然さが、病気などを生んだんじゃないかなと考えると、「もっと自然に帰れ」という警告ではないかと私は思っているのです。環境問題を考える上でも、もっともっと穀物菜食を勧めたいと考えているところです。まだ私も勉強途中なので、人にしっかりと教え伝えるところまではなかなか至っていないのですけれども、少しずつその役割を果たしているところです。

例えば私たちがいるユースホステルでは、環境問題を考えるというのがテーマなので、玄米菜食のお料理だけを出させてもらっています。来たお客さんにそういう体験をしてもらって、考えてもらうきっかけを作っています。細々ですけど、でも、お客さんの中にもいろいろな問題を抱えた方がいらっしゃるって、例えば、ガンなんですとか、アトピーが治らなくて困っているんですとか、そういうお客さんがいて、どうしたらいいですかって言う声を聞くと、お勧めして良かったなというのがすごくあります。本当に地道ですけども、これからもずっと続けて生きたいなというのはあります。

「これからの夢」です。私はまだまだ未熟者で、活動もなかなか形になっていないのですが、まず1つ、自給自足的な暮らしを目指してやっていきたいなと思っています。ユースホステルの仕事をしながら自給自足的な暮らしというのはなかなか難しいのですけれども、例えば、少しでも米を作ってみるとか、家では薪ストーブを使っていますがエネルギーは自分で供給するとか。そういうような形で、より自然な形でやっていきたいなと思っています。私は子育て中ということもあって、ちょっと本腰入れてはできないのですけれど、今年も田植えをしました、少し。そういう形で少しずつやっていけたらなって思っています。

あとは、先ほども言ったように、「自然の力による癒しの場づくり」を自分の拠点にしたいなって思っています。自然の力って偉大だな、自然によって本当に生かされているなど

これからの夢

- ◆ 自給自足的な暮らし
- ◆ 自然の力による癒しの場づくり
- ◆ 森づくりによる地域づくり
地域から世界へ

みんなが幸せに自然の摂理に沿って生きること
【私は自然の一部です】

というのが今までの経験からあるので、そういうのをやっていきたいなと考えています。もっともっと自分の技術を磨いて、例えば食事療法とか、そういう自然療法とかの知識とか技を、皆さんに伝えられるような形で広げていけたらいいなと思っています。

また、自分の地域の自然は自分たちで守るとというのが一番の基本だと思うので、近くに荒れた森もあるので、森づくりによる地域づくりをやっていきたいなと考えています。果たして自分が生きている間にどれだけ森になるかは想像もつかないですけど、なったらいいなという夢ですね。地域で、自分の足元で活動してれば、輪がだんだん大きくなって世界に広がるのではないかなと考えているので、地域で活動して、でも視野は広く世界を見てやっていけたらいいなと思っています。

あとは、みんなが幸せに、自然の摂理に沿って生きること。これが私の一生かけてのテーマかなって思っています。堂々と、私は自然の一部ですということを言って生きられるような生き方をこれからしたいなと思っています。

皆さんに伝えたいこと

- ◆もっと外へ飛び出そう！ 地域へ世界へ
- ◆地域の人とのつながりをつくる
- ◆長い人生、大いに悩もう
- ◆失敗を恐れずに何でも挑戦してみよう
- ◆望めば夢は叶う！
生きること
それは一生学び、自分を磨くこと
与えられるのではなく、自らすすんで得るもの

最後に「皆さんに伝えたいこと」。私の数少ない経験からですけど、学生のうちから、もっと外に飛び出してみてください。地域へ、世界へ。私は叶いませんでした。健康じゃなかったから。でも、今健康な状態であるならば、是非、大学の中に籠もっていないで試みてください。学生のうちって社会に出る前の猶予期間だと思って遊んだりしがちですけども、逆に学生だからこそ得られる社会との接点、学生として社会に貢献できる役割というのは必ずあると思うので、そういうのを意識しながら生活すればもっと豊かな学生生活が送れる

と思います。

あとは是非、地域の人とのつながりを作ってみてください。これは、こういう活動をして思ったことなんですけれども、結局は人と人とのつながりなんだということを、痛切に日々感じています。1人じゃ何もできません。人とのつながりというのが一番、生きていく上での宝だなと思うので、そういう意味で、この山形にみなさんがたまたま来たのも何かの縁ですから、4年間だけであっても第2の故郷として、地域との、人とのつながりを作って、また戻ってこれるような、そんなつながりを是非作ってみてください。

長い人生なので大いに悩んでください。悩んで損することはないなと思っています。今までの経験上。短い経験ですけども実感するので、是非悩んでください。悩んでも、必ず選んだ道には答えがあって、裏づけとか理由とか、あとからちゃんと分かるようになっていって思うので、悩まないで、考えないふりして進むのが一番悪いと思うので、是非悩んでください。

あとは失敗を恐れずになんでも挑戦してみてください。学生のうちじゃないですか、失敗を恐れずになんでも挑戦できるというのは。社会に出るとなかなか怖くてできないことも、学生だからできること、たくさんあると思います。

あとは、望めば夢は叶う。こんな世の中で、なかなか夢を抱くというのは難しいかもしれないですけど、でも必ず、夢をいつも描いていけば、不思議と無意識のうちに努力しているはずで、その人自身は。そういう人は必ず本当に夢をかなえています。だから常に目標を持って行って欲しいなと思っています。生きることというのはどういうことかなって考えた時に、一生学んで自分を磨くことだなと痛感しています。やっぱり与えられる物ではなく、自分から、自ら進んで得る物なので、みなさん自主的にもっともっと行動していけたら、きっと、何かそこにはすばらしい世界が待っているんじゃないかなと思います。

本当につたない私の経験や活動から話させてもらったんですけども、皆さんに伝えたいことはこんな感じです。私も本当にまだまだなので、こういうことを意識しながら皆さんと一緒にいけたらなと思っています。ありがとうございました。